四つの成果が足場だ

「これから…」を誓う坑外分会

四山支部の坑場第七分会（坑外勤務者が結集）は、このほど会社側に四項目の要求を提出して担当係長と交渉していたところ、完全に満足なものとはいえないまでも、四項の要求それぞれに回答をひき出すことができ、「これはたしかに成果だ。こんどの闘いに取り組む場合、この成果を足場にしてがんばろう」と誓い合っている。

四項の要求というのは、①高所作業・取りこわし作業の時など使用するため、安全帽を現場にそなえつけること。②保安靴を現場にそなえつけること。③クレンザー（磨き粉のことで、手洗いに使う）を支給せよ。④クレーンの運転・ガス熔接などさせられている者のなかに、資格をもたない者がいる。万一事故でも起きたら問題だ。教育した有資格者をあてるか、作業をさせないか、いずれかを考えよ――というものだった。

これについては坑制側と二次～三次にわたる交渉をもった結果、①については、中古品ではあるが見張にあるのを使用して下さい。②については、修理品を取り寄せてそなえる。③については、見張のものを使用して下さい。④については、すでに管轄主席係員に連絡してあります――ということになったわけ。

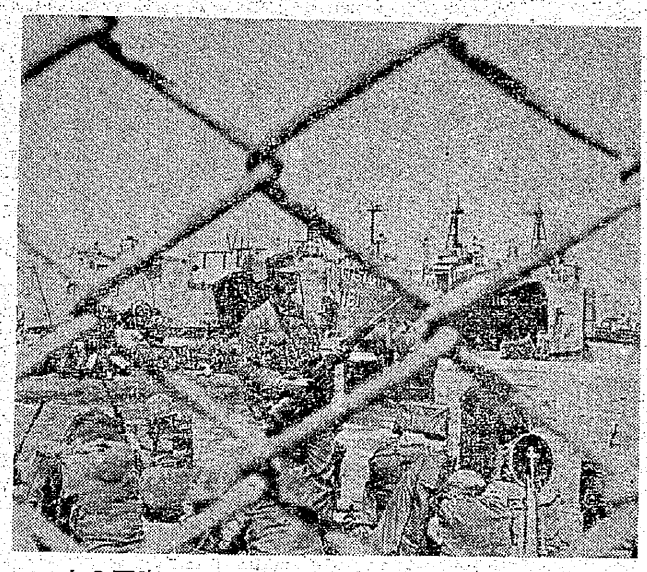
もともと同分会はこれまで、これと目立つほど活発な坑場闘争をやった経験がもたなかっただけに、組織的前進にとっての意義は大きい。

発展させよう職場の闘い

いま三池の労仂者（新労組員・組夫もふくめて）は、三井鉱山の保安サボのため二度にわたってひき起こされた災害から、CO闘争に太々とつらぬかれている〝生命を守る闘い〟の重要さを、改めて強く認識しなおした。

そのことが原動力となって、いま全山あらゆる坑場で反合理化闘争・保安闘争を力強くもりあげている。とりわけさきの九・二八災害後もひきつづき、炭車暴走などの事故がうちつづいた四山では保安闘争が発展しており、その一つがこの第七分会の闘いになった。

九・二八災害後、この機にこそ猛反省をうながさなければ……として、三池労組が提出した坑内保安確保上の要求を、なお無視してはばからない三井鉱山のことを思えば、坑場における反合理化闘争・保安闘争はさらに強化してゆくことが大切だ。そこにこそ「労仂者の生命をどのように守るか」「三たびCO患者を出すか出さぬか」という課題がかかっている。



上の写真はLST船団を抱かされている那覇港

黄金の土地をうばわれて

沖縄農民のうた

黄金の土地うばわれていまはなし
土地畑とられ　おちぶれたるはみな　アメリカのなせること
天幕の下から　日ごと
波の音ばかり聞き
降れば漏り　照ればかわき
泥水すする　この苦しみ
住みなれた土地、家も
焼きはらわれて　あとかたなく
衆人に願うは
親ゆずりの地畑を
力をあわせてとりもどすこと。

「根性ものがたり」（12）

鬼共をのさばらせないために闘う！

宮浦　平田光男さん

三池労組は闘いに
展望をもっている
俺たちはつくり出すのだ
労仂者が安心して仂ける
坑場を
母ちゃんが仂かなくても
生活できる社会を
鬼共がのさばらない世界を
（本紙十月一日号から）

この項に紹介する平田光男さん（宮浦鉱坑内保線工＝三十七才）の〝俺たちは展望をもつ〟という詩のなかの一節である。

組合のこととなれば

平田さんは妻の千佐子さん（三十三才）が、「組合のことといえば向うつっこみで、くらしのことも子どものこともなかつですよ。食べずには、何をやることもけんとですけど」ときびしい言葉を呈する、それほど組合運動のことについては目がない。

あの就労後、恐るべき差別支配をテコとして、全三池労組員の頭上に襲いかかってきたはげしい会社の攻撃にさらされながら、だれが何といっても動ぜず、三本線入りの坑内帽をかぶり通してきた平田さんである。

千佐子さんにすれば「私の方の父が三作の坑員だったせいで、兄弟や縁故に第二組合や会社側とのつながりが多うかったでしょう。ただ組合のことだけでかけまわって、何一つ相談にのってくれない主人との間にはさまって、私はもうどうしてよいかわかりませんでしたし、そんなことからつい夫婦ゲンカが重ってゆきました」というつらい事状も、平田になるとこうなる――

一番じつなかつたこと

「私があのころ一番じつなか思いをしたのは、母ちゃんが、玄関に掲げていた三池労組員のシンボルの小旗を、ちりぢりにひきちぎったときです。私はその日、ちりぢりにひきちぎられた小旗をもって支部にゆき、思いっきり泣きました。仲間たちが『今日奥さんから破られたその小旗は、いつかはきっとたたかいとる、楽しくしあわせな日のための記念になるだろう。がんばらんの』とはげましてくれましたが……」

しかしいま、千佐子さんから「質屋にこそ一枚の着物も渡さずにすみましたけど、重い足をひきずって親のもとをたずねては、五百円、千円と借りて、くらしをつないでいくほかなかった私でした。つらかったですね」と述懐されると、「そんなことがあったのか」と、人一倍根が正直な平田さんは、心をしめつけられるのである。

長期抵抗路線を胸に刻み

とまれ平田さんは、三池労組員としてたたかってきた。その平田さんの胸の底に秘められている信条こそ、はじめに紹介した詩の一節――「俺たちはつくり出すのだ……鬼共がのさばらない世界を」であることは指摘するまでもなかろう。それというのも、その昔、共に大浦鉱で、親父が先ヤマならおふくろが後ヤマで仂きながらもなお赤貧洗うがごときくらしを余儀なくされていた、炭鉱労仂者の子として生まれたからには、まさに当然なことかも知れない。

いまは自から、三池主婦会の活動家の一人に育っている妻の千佐子さんとの間に、小学三年の克幸君とまだ五才の庸一君という、二人の子宝がある。「とかく子どもたちが犠牲になりますばってん……」と千佐子さんと顔を見合せながらも、平田さんは決意を秘めて宣言する――

「それならばいっそう〝長期抵抗路線〟を胸にきざみつけて、がんばるばかり。昔のタコ部屋生活への逆もどりは、許されんです」と。

メーデーのデモで地域分会の先頭に長男と克幸君と

新労幹部は正直か

解説真実見抜き闘おう

やがて詳細を明らかにするときがきようが長期抵抗路線がつらぬかれた三池労組の闘いが、ついにCO闘争における政府・労仂省の譲歩（といっても、断じて認められないところがあるといわれるが）となったことにこの譲歩に対して、三池新労組の山下組合長が民社党関係者と労仂省にやってきて「そんなことされては立場がない。正直者がバカを見る」と圧力をかけたという。

三井鉱山の指しガネでそうさせられたのはきまっているが、ひと口目には三池労組に不当な中傷を加えながら自分ら幹部の裏切り行為を正当化して、組合員の目のとどかないところではどんなことでも平気でやる新労組幹部は、果たして正直者だろうか？

一体、新労組のCO患者たちが組合幹部の圧力をけって不当な傷害認定に対して再審査を要求して立ったことや、あぶなつかしいCO患者が今日まで坑場にさがらずにすんだことなど、だれの闘いによって可能となったのか。まさか昨年十月の労仂省通告を、待ってましたとばかり、早々と認めた新労組の幹部だったということはできまい。

CO闘争は三項の要求を実現することばかりでなく、仂く者の生命を守る反合理化闘争の大きな支柱で、仂く者すべてに通ずる重大な闘いだ。

新労組員の仲者は幹部のゴマカシに目をうばわれず、共に手をとって闘ってほしい。三度目の大災害を招かないために。

即興和歌三題

職制のとんだ口だし

憎らしさ妻の指見てなおまさる資本の合理化うちてしやまん
アンケート借金返済占める位置わが分会のトップゆくかな
裏間のビラの配布に立つ仲間ビラを示して道を説くかな

（本所支部第四分会新聞〝すくらむ〟から）

昼休みに十分前。Hさんが手洗い場で手を洗っているところを、転制が通りかかった。

まだ休みには早いと見たか、その転制自分の腕時計を見て、手を洗っているHさんにきつい声でいった。

「仕事やめるのには、少し早かですばい」

Hさん、すかさずいわく――

「じょうだんのごつ。こげな汚れた油手で、小便ばさるるな。あんたが出してやるならよかたい。手は洗わんめエ」

聞いた転制、あわてて「あ、そうですか。どうも失礼しました」といったかと思うと、そそくさといってしまった。

（四山支部第七分会新聞〝しょくば新聞〟から）

私の書棚

活写された〝歴史〟

山本作兵衛 著
「炭鉱（ヤマ）に生きる」

ある日突然、東京の仲間から「面白い本があったから、お世話になったお礼に贈りたいが、よろこんでもらえるだろうか？」といってきた。その本こそ、ここに紹介する山本作兵衛という人があらわした〝炭鉱（ヤマ）に生きる〟という画文集である。

山本さんはもう年寄り。幼いころから両親、兄弟と共に仂いてきた炭鉱の仕事から離れてから久しい。だが、山本さんをそのころの苦しみ多い――いや苦しみが多かったことが、かえってそうさせたのだろうが――思い出がとらえて離さなかった。それが山本さんの情熱をかりたてて、この画文集をなしたといえよう。

そのころ炭鉱労仂者の子として絵筆をとる余裕こそなかったが、さいわいなるかな山本さんは、幼いころは絵ばかり書いていた。何よりもそれが好きだったのだ。でもその間何十年を過ぎたいま、改めて絵筆をとることがどんなに困難なことかいうまでもないが、しかし山本さんは老骨にムチを加えながら、どうしても忘れることができない炭鉱生活の思い出を、活写しはじめたのである。

いまは、次々によみがえってくる思い出を刻みこんだ絵が、たくさん積み重ねられた。そのなかから選んだ絵にこれまた素朴な文でつづった手記を添えて、こんどの出版になったのである。

目次に①炭鉱（ヤマ＝以下同じ）の生活、②炭鉱の米騒動、③炭鉱の労仂――とあるのを紹介すれば、もう内容にふれることもいるまい。ただこの本を読んで、いまつくづく思うことは、坑場に少なくない文学愛好者や美術愛好者が固き提携をもって、画文集〝三池は闘う〟でも生み出されたら……ということ。これは無理な願いだろうか。

とまれ、本書の一読をおすすめするのである。

―K記

（本書は講談社出版四二〇円）